

愛媛大学理学同窓会報

第12号

2021年2月



《目 次》

会長挨拶……………	2	会合だより……………	16
学部長からのひとこと……………	3	総会報告……………	17
母校の窓……………	4	各種事業の紹介と報告……………	18
教室だより……………	10	会計報告……………	21
東京支部だより……………	13	事務局だより……………	21
関西支部だより……………	15	あとがき……………	23



「コロナ感染」と「はやぶさ2」に思う

会長 仲 田 秀 雄
(昭和47年卒)

理学同窓会の皆様にはそれぞれの職場でまたご家庭で益々ご健勝でご活躍のことと拝察いたします。と、書き始めるのが普通かな？でも、今年はどうかな？と思います。

「3密」・「濃厚接触」・「不要不急」・「自粛」・「クラスター」・「小中高の臨時休校」・「医療崩壊」・「PCR検査」・「人工心肺装置」・「パンデミック」等々の聞き慣れない用語であったのが、日常に何の抵抗もなく耳に入り、口から出ている自分の変化を認めざるを得ない。残念でもあります。

授業料や生活費を家からの送金とアルバイトで賄っている学生が、まさに窮地の生活を余儀なくされている現状が浮き彫りにされています。親の経済状況の悪化、アルバイトができる案件の激減、そのために大学や大学院を退学したり、休学したりした学生が全国で少なくとも5,000人はいるとも聞きます。食費を切り詰めている学生も3割とか。食べ盛りの18歳から22歳あたりの大学生なのに…。非常事態であります。

大学も実験関係を除けば、オンライン講義で対応しているとか。学生のキャンパス内への立ち入りを禁止した時期も。各種行事もほとんどが中止。大学の学位記授与式・入学式及びホームカミングデイも中止になりました。初めてのことです。

隔年で実施している「理学同窓会総会」も対面では開催することが出来ず、「紙面での総会」にせざるを得ませんでした。先輩・後輩・同級生そして指導を賜った先生がたに会える楽しみの機会が延期になりました。

大学に通うことが当然、休みには自宅に帰り年末年始は家族と一緒に過ごすのが日常だと信じていました。それがまかり通らない今、「家族とは？」感染リスクを気遣って松山に残って年越しをして思うこと、「大学へ行って学ぶとは？」友と直接触れて豊かな知識を得る場所が大学であること、を改めて考える機会になれば有意義かなと思います。

地球がコロナ渦の中、小惑星探査機「はやぶさ2」が、小惑星りゅうぐうで採取した岩石を持ち帰る快挙がありました。地球との往復6年間の総飛行距離は52億キロに及んでいます。このサンプル採取装置には新居浜の会社が開発に携わっていたと言います。まさに愛媛のものづくり技術の高さを全世界に示したとっても明るいニュースになりました。この快挙は初代の「はやぶさ」の経験が役立ったということ。

経験が生かされることは素晴らしいことです。でも「新型コロナウイルス感染」の経験が生かされるような事案が発症しないことを願いたいものです。国民全員がマスクを着用しましょう、と呼びかければ守れる日本人、何とか「コロナ感染」の収束に向けての研究をお願いしたいと思います。



理学部長 平 野 幹

愛媛大学理学同窓会の皆様におかれましてはますますご清祥のことと拝察し、お慶び申し上げます。前号にて学部長として皆様にご挨拶申し上げてから早2年の月日が経ちました。その間の理学部に関連した様々な出来事について簡単にご報告いたします。

前回のご挨拶においても触れましたが、理学部の新しい教育体制が平成31年度（令和元年度）からスタートしております。1学科による新教育体制では、数学・数理情報、物理学、化学、生物学、地学、の5つの専門分野教育コースに加え、理学の知識を地域や世界とのコミュニケーションに活かす力を育成する「科学コミュニケーションプログラム」、理学系先端研究センターの研究力を活かした科学教育を実践する「宇宙・地球・環境 課題挑戦プログラム」、といった特別履修プログラムを設置し、理学人としての多様なキャリア形成を目指した人材育成を行っています。現在は、新体制の1・2回生、旧体制の3回生以上が混在する過渡期ですが、構成員一丸となって学生たちの育成に尽力しているところです。

平成30年は理学部設置50年の節目の年でしたが、その翌年は愛媛大学開学70周年の年でした。令和元年11月11日(月)に記念式典および祝賀会を開催し、同窓会の皆さんをはじめ多数の関係者のご参加により、盛会裏に終えることが出来ました。2年連続での節目に理学部長として携わることができたことを喜ばしく思うと同時に、理学部の更なる発展に向け

た責任を感じ身が引き締まる思いです。

世界中に感染が拡大して終息の気配が見られないコロナ禍の影響は、春の風物詩である卒業式・入学式の中止をはじめ大学においても甚大です。今年度は授業の開始が遅れただけでなく、ほぼ全ての授業がインターネットを介した遠隔授業となり、普段は学生たちで賑わうキャンパスが閑散としています。授業については、各教員がパソコン技術を駆使してなんとか滞らずにすみましたが、仲間と交流できない学生たちは非常に強いストレスを感じています。更には家計の急変などで経済的にも苦しい状況に陥っている学生も見られ、この苦境を何とか乗り越えてもらえるよう全学を上げて様々な支援を実施しているところです。

先日、理学人材の育成と教育研究活動の環境整備等をご支援いただくことを目的とした「理学支援基金」を創設しました。近々にご案内できるものと思いますが、同窓会の皆様におかれましてもご支援のほどよろしくお願いいたします。

なお、理学部の最新の教育・研究成果につきましては、ホームページ（<http://www.sci.ehime-u.ac.jp>）にて随時公開しておりますので、是非ともご参照ください。

末筆ながら、皆様の益々のご健勝とご多幸を心よりお祈りしております。

母校、愛媛大学理学部では2019年度末に生物学教室の大森浩二先生、地球科学教室の入船徹男先生、

森寛志先生が定年退職されました。また、2020年度末に数学教室の平出耕一先生、化学教室の長岡伸一先生が定年退職されます。寄稿していただいたメッセージを掲載しています。

コロナ禍中で退職を迎えて

入 船 徹 男

平成元年4月に愛媛大学に赴任し31年。この3月末にはとりあえず無事に退職を迎えるはずでした。ところが我が国においても猛威を振るいだした新型コロナウイルス（以下コロナ）のおかげで、卒業式をはじめ様々なイベントがキャンセルとなり、気持ちの切り替えができぬままその日を迎えてしまいました。せめてもの慰めは、退職に際して関係者が「業績集」とは名ばかりの、立派な文集をつくってくれたことです。主に卒業生や学会関係者などを中心とした内輪の文集ですが、このような状況の中で何よりの記念となりました。本来はここに書くべき内容も、ほとんどこの文集に尽くされております。祝賀会等での配布機会を失い多数の残部がありますので、ご興味のある方はご請求ください。

退職以降も引き続きセンター長を拝命しましたが、入学式も取りやめになり、授業開始は大幅に延期されました。この間多少時間の余裕もできたので、コロナについて毎日インターネット情報をチェックするとともに、情報源となっている原著論文のいくつかにも目を通しました。この結果、これが知れば知るほど厄介な問題であり、多くの皆さんと同様、先行きの不透明さに大きな不安を感じているのが正直なところです。

コロナ問題は医学・医療の問題にはとどまりません。薬学・化学・生物学はもとより、物理学・数学・工学・経済学・心理学・教育学など、ほとんどありとあらゆる学問分野が関係する、極めて総合的な知識と知恵が必要な問題だと思います。残念ながら私の専門の地球科学はあまり出番がなさそうですが、それでもこの問題に対する科学的な考察は、行動の指針を考える上で重要ではないかと思っています。

例えば人が発する飛沫の飛び方や拡散の仕方は、

基礎的な古典力学・統計力学でほぼ理解できますし、感染者の増加の傾向は、数学の基本的な関数や統計処理の知識があれば、日々発表される数値に一喜一憂しなくてもおよその予想がつきます。身近なところでは、マスクの問題があります。通常のマスク繊維の隙間は小さくても5ミクロン程度ですから、0.1ミクロンオーダーのウイルスにとってはザルのようなもの。コロナにおけるマスクの役割は、ウイルスを止めるのではなくウイルスを含む液滴を止めるのが主な役割のはずですが、この点を理解している人が意外と少ないのに驚きます。

我が家でもマスク不足が深刻化し、家内らが毎日マスク作りに励んでくれています。でも数十ミクロンの花粉に対するの同様に、マスクがウイルスもブロックしてくれるかと思っていたようです。ウイルスとマスクの穴のサイズ感や、ウイルスと飛沫の挙動を理解していないと、せっかくマスクを作っても有効に活用できない可能性があります。また、一定程度の大きさの飛沫をブロックできても、飛沫の水分が蒸発すればウイルスはマスク表面に付着したままでしょう。こうした「乾いたウイルス」は、呼吸により容易に口の中に吸い込まれると考えられますから、（飛沫中のウイルス濃度にもよりますが）こまめに捨てるか洗浄する必要があります。マスクミヤインターネットによる情報も、こういった基本的な原理や使い方を、科学的・定量的に示すことは少ないと感じます。

コロナ禍の最中であって我々退職教員ができることの一つは、それぞれの専門を生かして、この問題を科学的・多面的に考察して、それを一般に向けて発信することではないかと思っています。現時点（4月初旬）では、日本においてはコロナによる致死率が

比較的低いとされています。それを裏付ける根拠として、マスク文化があるとか、BCGが効いているなど、様々な情報が飛び交っています。もちろんこれらの中には正しいものが含まれる可能性もありますが、その多くは科学的に証明されていない、現象論に基づく希望的解釈にすぎません。我々にできることは、そのような説の根拠や出所をきちんと検証・分析し、その結果をもとに、人々の行動の指針となり得る情報を提供することではないかと思います。

私自身、この半年くらいの間にインフルエンザにかかるとともに、带状疱疹も経験しました。1か月くらい前までは、「これでコロナにかかればウイルス三冠王」などと冗談を言っていましたが、これらはいずれも免疫力が落ちている証拠。最近の状況を

見ていると、明日は我が身と、本気で身辺整理もはじめています。定年後もしばらくは、楽しみながら研究・教育も続けたいと思っていましたが、それも全く見通しがたたなくなりつつあります。

少々暗いご挨拶になってしまいましたが、このような状況の中、今後は自分の専門分野だけでなく、上記のような観点から何らかの社会貢献もできればとの思いを強めています。それなりの覚悟はしつつも、大学人として科学・技術の進歩を信じつつ、この問題の解決に多少なりともお役に立てればと思います。一方で、本稿が印刷になる頃にはコロナ問題が終息に向かい、この挨拶文が笑い話に終わることを心より期待しています。

愛媛大学理学部で過ごした日々と自然災害

森 寛 志

私は1994年4月に理学部地球科学科に赴任して以来26年間という長い時間を充実して楽しく過ごし、こうして無事に定年を迎えられたのはこれまでに理学部で出会い、共に過ごした多くの皆様のお陰だと感謝しております。本当にありがとうございました。

理学部ですごした26年を振り返るにあたって、私が地球科学に関わっていたこともあり、この間に起こった自然災害、中でも地震被害を目の当たりにした時に感じたことや考えたことを述べていきたいと思います。

私が前任地の東京から松山に赴任した次の年、1995年1月17日に阪神淡路大震災が発生しました。地震発生は早朝午前5時46分で、私が当時住んでいた東温市にある愛大横河原宿舍の3階でも地震の揺れに驚いて目を覚ましたのを覚えています。神戸という大勢の人が暮らす大都市を最大震度7の大地震が襲ったのは衝撃でした。阪神高速3号神戸線の橋脚が横倒しになった光景がテレビに映し出され、この地震の揺れがいかにすさまじいものだったかを物語っていました。神戸市長田区などの住宅密集地で発生した大規模な火災の被害も甚大でした。大都市でひとたび大地震が発生すると6,000名を超えるような大勢の尊い命が一瞬で失われることを学びまし

た。地震の被害の大きかった場所は、地震断層に沿った比較的狭い範囲に集中して長く伸びており、やはり神戸市の海岸に沿った埋め立て地などのいわゆる地盤の弱い場所でより被害が大きかったようです。これは地表に暮らす我々にとって地震の揺れの大きさを決める要因として地震そのものの規模以上に揺れに対する地盤の強弱がいかに重要であるかを改めて印象付けることになりました。

2001年3月24日の15時28分に芸予地震が発生しました。震源地は安芸灘で、震源の深さは50kmでした。松山市の震度は、震度5強と記録されています。この日は土曜日で、私は東温市の自宅の庭にいましたが、まわりの樹木や家屋がユサユサと揺れ始め、とても驚きました。私がこれまでに自身で直接経験した地震の揺れの中では最大のものでした。翌週の月曜日に大学に向かうと研究室のロッカーの扉が皆半開きになっており、まるで泥棒に荒らされたようになっていたのには驚きました。幸い家具が倒れたり、棚の中身が散乱したりというようなことはありませんでした。しかし、理学部本館の壁面のあちこちにX字のひび割れが生じており、震度5強の揺れがあったことが読み取れました。私の自宅は東温市にあるため、大学のある松山市より揺れが小さかった

ようです。もし理学部の建物内にいたら、かなり驚いて机の下に潜り込んでいたかもしれません。

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。地震そのものは宮城県牡鹿半島の東南東沖130km（深さ24km）を震源とする東北地方太平洋沖地震で、地震の規模を表すモーメントマグニチュードは9.0で、日本周辺で起こった観測史上最大の地震でした。この地震による巨大津波とこれに伴う福島第一原子力発電所事故による未曾有の災害が発生しました。1000年に1度という規模の大地震と大津波が私自身の生きている同時代に起きたというのはまさに衝撃的でした。太平洋から押し寄せた大きな水の塊が沿岸の町や人々の暮らしを次々に飲み込んでいく様子を写した映像は今でも私の脳裏に深く刻み込まれ、一生忘れることはないと思います。最も深刻な事態は、福島第一原子力発電所事故で、事故の後始末にはあと何十年かかるのでしょうか。原子力を含めたエネルギー問題や地球温暖化問題は、人類の抱えた難題です。21世紀も20年が過ぎようとしていますが、人類はこの問題にどのように立ち向かっていくのでしょうか。大学を定年になる年齢となった私は、これからの若い人たちに期待するしかないのが寂しい気持ちです。

2016年4月に熊本地震が発生しました。この地震の特徴は、震度7を観測する地震が4月14日夜および4月16日未明に発生したほか、最大震度が6強の

地震が2回、6弱の地震が3回も発生したことです。大きな揺れを伴う大地震がこれほど立て続けに起こったことはこれまでにないことです。私も訪れたことのある熊本城が甚大な被害を受け、無残な姿がテレビに映し出された際には本当に悲しい気持ちになりました。

2018年9月6日に北海道胆振東部地震が発生しました。この地震の最大深度は7で北海道では初めて記録されたそうです。震源に近い厚真町ではおびただしい数の土砂崩れが発生し、その後グーグルアースを使って観察したその様子には驚かされました。

ここまで、私の記憶に強く残ったいくつかの地震災害を振り返ってきましたが、新しい地震災害が起こるたびに「これまでに私たちが経験したことのない」とか「予想しなかった」という言葉がいつも使われてきたように思います。これは地球と人間の活動のタイムスケールが何桁も異なるためであり、まさに自然なことだと思います。自然災害、特に地震災害はいつどこで発生するのか予測することができません。しかし、災害の発生に備えて常々準備しておけば、被害を最小限に抑えることができると思います。物質的な備えだけでなく、それ以上に心の備えが重要だと思います。これからも悲惨な自然災害は繰り返し発生するのかもしれませんが、その被害が少しでも軽く済めばと願っています。

退職にあたって

大 森 浩 二

1983年4月に、フェリーに乗って、四国に上陸し、愛媛大学理学部に生物学科の助手として赴任しました。その頃の愛媛大学の大学祭で、正門の上に大きな瀬戸大橋の模型が飾られていたのを覚えています。開通したのはその5年後のことでした。大学院博士課程の途中から赴任したため、初めの数年は博士号取得のために九州天草（九州大学の臨海実験所所在地）へ通い、最後に国内留学をさせていただき、九大理学部から「干潟に生息するヨコエビの個体群動態論」により理学博士を頂きました。愛媛では、重信川河口の干潟で汽水性生物の研究を続けること

としました。この頃、宇和島の遊子漁協からの依頼で愛媛大学（工学部、農学部、理学部）のグループとして宇和島湾の養殖による有機物汚染の調査をはじめ、水域生態系の持つ生産と分解のバランスの最適解を見つけ、それを沿岸漁場生態系の健全性の指標とするとの研究を行いました。これらの研究がもとで持続的養殖生産確保法が作られ、施行されたのが1999年でした。前後してこの研究チームを中心として沿岸環境科学研究センターが新設され、その構成員となりました（理学部へ赴任してから16年目の年です）。一方、海洋調査に加えダム湖・湖沼生

態系、東南アジアでの人工マングローブ林の機能解析の調査も始めました。この頃からベトナムヘマングローブ林生態系の調査に行くようになり、ベトナム国ハノイ大学の学生を大学院への留学生として受け入れ、数名のベトナム人に理学博士の学位を取得させることができました。その後学部新設に関わり、2016年、また、新設の社会共創学部環境デザイン学科へ移り現在にいたっています（16年周期で別組織へ放り出されている？）。

ここまで、現実の人間社会にどっぷりとつかった生態系の研究をつづけながら、生物進化科学、その中心的課題である種分化理論に20年前から取り組んでいます。

1858年出版のダーウィンの「種の起源」を土台としたネオダーウィニズムの、与えられた環境において、ランダムな変異から生まれた、高い適応度を示す遺伝子を持つ個体が生き残るという自然選択（Natural Selection）説が、現在、生物進化の原動力とされています。ただし、ダーウィンの「種の起源」では、自然選択による新たな種の形成過程を説明できず、それ以来、100年にわたり、多くの議論がなされましたが、1960年代にマイヤーが種の形成は、地理的隔離による種個体群の分断化（= allopatric speciation）によるものが主とし、それが定説となりました。ところが、過去5年間に全ゲノム解析が多くなされるようになってきて、共通の祖先種から分岐したと思われる2種の各ゲノムのうち、適応的形質の遺伝子群が先に分岐し、のちに、分岐する二つの個体群間の遺伝子交流の減少に伴い、中立的な遺伝子群が分岐する例が普通に見られました。これは、地理的な隔離なし（= sympatric）、または、隔離が弱い（= parapatric）場合における種分化が普通に起こっていることを示しています。

祖先種から新たな種への変異が生じる種分化のごく初期の段階で、既存の種分化モデルは、新たに形成される種が占有する新たなニッチへのほぼ完全な選好性のアプリオリな遺伝子変異（=かなり無理があると考えられる）を暗黙の裡に仮定しています。しかし、この「ほぼ完全な選好性」という前提が崩れると地理的隔離なし、または、弱い場合の種分化が成立しなくなることが私の種分化モデル解析から証明できています。全ゲノム解析の研究結果から、地理的な隔離なし、または、隔離が弱い条件下における種分化が普通に起こっているとすると、分岐のごく初期の段階において、（まだ構成されていないが、後の段階において構成されるであろう新しいニッチへの）ニッチ選好性遺伝子（群）を介さない、生物の主体的な認知能力（=ある基準（拡張された適応度の最適化と考えられる）により自らが選択される環境（= selection field）を選ぶこと：ただし、認知能力そのものはNatural Selectionにより進化した適応的な能力と考えられる）による新たなニッチへの選好性、つまり、自律選択（Autonomous Selection）を考えざるを得ない、という結論に達したところで退職の年となる2019年の年度末を迎えたわけです。時間切れです。ただ、2022年3月まで、特命教授として現在所属の社会共創学部へ残ることとなっていますので、その間、この地上で最も高い（自律選択に必要な）認知能力をもつと自負する我々ホモサピエンスの、ホモハイデルベルゲンシスからホモサピエンスへの最後の種分化を題材とした、分析哲学や量子力学で唱えられた自由意志定理に基づく種分化理論の論文を発表していきたいと考えています。

38年間本当にお世話になりました。ありがとうございました。

時間の単位

平 出 耕 一

10年ひと昔という表現をだいぶ前に聞いたことがあるが、ネットで調べてみると、5年をひと昔前と感じる人が一番多く、次いで3年で、10年をひと昔前と今でも考えている人の割合は3番目になってい

る。確かに5年是一个の区切りになりそうで、科研費の申請では、5年は最長の研究期間で、3年はほぼ最短になっている。理学部で以前発行していた「教育・研究のあゆみ」も5年ごとだった。しかし、こ

の5年とか3年とかは、連続的に流れる時間の短い一つの単位だと思う。それに対し長めの時間の一つの単位として10年があるように感じる。このくらいになると物事は随分と変化する。大学に入学してから大学院を経て就職するのに大体10年かかったし、大学院での研究テーマに一つの終止符を打つのに更に10年くらいかかった。更に10年ほど研鑽を積んだが、このくらい経つと、辞書や本に引用されるようになってきて、国内外問わず世の中に知れ渡ってしまう。数学のような辛辣な学問は、頑張ったとしても、そのくらいの年齢で研究を止めるのが普通だと思っていた。今から30年ほど前、筑波大学から異動してきたが当時もそう思っていた。送別会するとき、少し大袈裟に、あと20年頑張りますと宣言した覚えがある。その時はそれほど本気ではなかったけれども、まさか逆に更に10年も追加されるとは夢にも思わなかった。そもそもその頃は、若手という明確な概念がなく、34歳までが少し優遇されていた時代で、科研費の申請も奨励研究というのがあって37歳まで、それを過ぎると今でいう基盤研究で申請しないといけなかった。しかも研究期間は1年と定まっていた。ある意味、結構のんびりとした時代だった。その若手の頃、研究集会に参加するための交換条件で、北海道大学であった国立32大学の会議に出たことがある。情報交換の場だったが、メインが東京大学数理科学研究科の設置についての詳しい説明で

あったが、1人参加だったのでメモを取るのが大変だった。その内容は教室に持ち帰って少しは役に立ったと思うが、その頃から以降、全ての国立大学はものすごく大きく変わっていくことになり、15年くらい経過して、ついに法人化されてしまった。これは、丁度バブル経済の崩壊からリーマンショックの手前までの期間に起きたことで、その後もゆとり教育というのが続いていった。この様な中で、動き変化するのを止めると、倒れて消滅してしまうという仕掛けを組み込まれたような感じである。最近では、GとLによる大学間の差別化、年俸制導入など極まりを見せているが、これから先30年の間に何が起こるかは誰にも予測できないだろう。人工知能との関係でシンギュラリティを唱える人がいるが、それは今から30年後には既に起こっている出来事である。30年を時間の単位としてみると、社会環境はとてつもなく大きく変わったし、今後も変わるだろう。しかし、この30年で見ると、数学に対する研究態度がぶれることはなかった。そして、研究内容はどんどん発展している。研究対象も以前からの力学系の定性的研究を継続しつつ、今は加えて定量的研究も行い発展的に展開している。やはり、数学の研究の辛辣さは常套ではない。とても体力を必要とするし、それを持続しつつ、発展し続けなければならない。これは、数学の普遍性がもたらす必然だと思う。これからも真剣な態度で数学の研究を続けたい。

愛媛大学を去るに当たって

長 岡 伸 一

令和3年3月に大過なく定年退職を迎えることができました。これもひとえに在任中にお世話になった学部長をはじめ教員の皆様、職員の皆様、学生大学院生諸君、同窓会の皆様のおかげと心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

私は、京都大学理科学研究科を修了後、北海道大学応用電気研究所（現在は電子科学研究所）、岡崎国立研究機構（現在は自然科学研究機構）分子科学研究所を経て平成元年10月16日に愛媛大学理学部に転任して参りました。前任地の事務職員からは、転任日が中途半端な16日なので転任翌日の17日には月給

が支給されず、11月17日に合算されて支給されるであろうと言われて転任して参りましたが、意外にも10月17日にきちんと給与が全額支給され、愛媛大学の事務組織がしっかり機能していることを思い知らされました。それ以来、退職に至るまで理学部職員の皆様にごっかりさせられたことはありません。誠にありがたいことでした。

理学部では、それまでに行ってきた化学反応の電子状態依存性の研究である励起状態での分子内プロトン移動反応や内殻励起によって分子内の特定の原子付近だけで起こる反応の研究に加えて、抗酸化反

応の研究をさせていただきました。特定領域や重点領域の科研費が採択されて学生院生諸君とともに愛知県岡崎、茨城県つくば、兵庫県佐用のような日本のみならず、日米科学技術協力事業で米国にまで飛び回りましたので、留守中には他の教員の皆様には大変ご迷惑をお掛けしたと思います。誠に申し訳ありませんでした。いずれの研究でも、学生院生諸君は愛媛県唯一の国立大学の学生院生として、想定外のプライドを持って卒業研究や大学院の研究に取り組んでくれました。その成果は二百数十報の原著論文にまとめましたが、まだ報告できていない研究もあり、退職後もしばらくは論文のとりまとめを進めてまいります。

教育では、量子化学や構造化学の授業などを担当し、特にPCを用いた分子軌道法の演習という新しい教育手法に取り組みました。その成果は、アメリカ化学会の教育専門誌などに掲載されております。量子化学を充分理解することは数学が得意でない学生院生には難しいですが、単に講義を聴いて紙と鉛筆で演習をするだけではなく、普及しているマイクロソフト・エクセルを利用してデジタル的に「手を動かす」ことによって理解を促進しようと考え、このような実習を開発しました。原子分子の世界はとびとびなのに、さらに世間はとっくに連続なアナログからとびとびのデジタルに変化したのに、量子化学の教育が今もって連続を前提とした微分積分によって記述されるシュレーディンガー方程式に基づいているのは残念の限りであり、私の在職中にできるだけデジタルの世界に近づけるように教育手法を改良することを志してきましたが、数理統計や確率を用いた量子化学の教育手法を確立するまでに至らず中途にて退職することになりました。

社会貢献や運営では、日本化学会速報誌編集委員、

分子構造総合討論会（現在、分子科学会）開催事務局、ビタミンE研究会開催代表世話人、環境機能科学専攻長などを拝命しましたが、力不足で余りお役に立てずに多くの先生方に負担が掛かったことをお詫び申し上げます。

北海道大学に初めて就職してからも、愛媛大学においても、様々な別の大学にお招きをいただきながら最終選考では不採用を繰り返していたにもかかわらず、愛媛大学理学部にお招きいただいてそのままずっと拾ったままでもいただいたことに心より感謝いたしております。前任地から転任の折には、王昌齡の「洛陽の親友もし相問わば一片の氷心玉壺にあり」と唐詩選を引用しました（分子研レターズNo.23）。愛媛大学を去るに当たってどのような言葉を残したら良いのか迷っています。学生時代から「田舎の勉強よりも都の昼寝」と言われて教育されてきましたので、社会資本のより充実と大学環境のさらなる整備は期待したいところです。時代が変わっても大学教員に残るのは研究成果でしょう。私は理学部研究奨励賞などいくつかの賞をいただいたとはいえ、会心の研究成果が乏しかったことは実力不足でお詫びする以外にありません。しかし、転任以来毎年友人たちが「松山詣で」と称してじっくりと研究を語り合うために訪ねてくれ、多くの論文にまとめられたのは良い思い出です。

最後に、多くの方々に支えられて退職を迎えることができたことに心より感謝を申し上げるとともにご迷惑をお掛けしたことをお詫び申し上げ、さらに黙々と尽くしてくれる妻にありがとうと言って愛媛大学を去るに当たっての言葉とさせていただきます。末筆になりましたが、愛媛大学理学部のさらなる発展と皆様のご活躍を念じております。ありがとうございました。



【数学教室】

皆様におかれましては、ご健勝のことと存じます。前回の近況報告から数学教室では様々な変化がありました。教員人事では、令和元年7月に猪奥倫左准教授が東北大学へ、令和元年8月に大下達也助教が慶應義塾大学へ、令和2年9月に内藤雄基教授が広島大学へそれぞれ転出され、平成31年4月に幾何学（幾何学的群論、位相幾何学）がご専門の加藤本子先生が助教として着任されました。また、令和2年10月に尾國新一先生、山内貴光先生、山崎義徳先生がそれぞれ教授に昇任しました。さらに、平出耕一准教授が本年度末日をもちまして定年退職されます。平出先生には30年の永きに渡り理学部数学教室の運営と発展にご尽力を賜りました。心から感謝致します。

学生に関しましては、従来通り中学・高校教員を目指す学部生・大学院生が多く、毎年15名前後が新たに教壇に立っています。民間企業や自治体への就職につきましても、おおむね順調な状況が続いています。

平成31年4月に理学部が改組され、理学部数学科は理学部理学科数学・数理情報コースとなりました。この改組は、刻々と変化する社会のニーズに対応し様々な場で活躍できる理工系人材の育成を目指したもので、情報化社会を支える先進分野が新たに加わりました。本コースの新しいカリキュラムでは、従来の純粋数学分野、応用数学分野に加えて、新たな数理情報（データサイエンス）分野の教育が始まりました。また、令和2年4月に愛媛大学データサイエンスセンター（CDSE）が設立されました。数学・数理情報コースの平野幹教授がデータサイエンスセンター長に任命され、数学・数理情報コースの教員全員がセンターの構成員になりました。さらに、本大学は数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアムの協力校として選定されました。これからは、データサイエンスの研究及び全学のデータサイエンス教育へも協力して参ります。

今年は、新型コロナウイルスによって数学・数理情報コースの研究・教育も大きな影響を受けました。国内外の様々な研究集会が中止、もしくは遠隔会議形式での開催になりました。また、出張も完全に

来なくなり、共同研究も実施しづらい状況が続いています。本コースの教育も、ほぼ遠隔授業形式で行われました。当初は多くの教員が遠隔講義に殆ど経験がない状態でしたが、情報を共有しながら授業開発に取り組んでいます。新型コロナウイルス感染の終息の見通しが付かない現状において、遠隔授業のレベルをさらに上げることは来年度の大きな課題になります。

様々なことが制限されている状況ではありますが、数学・数理情報の能力を身につけ、社会の期待に応えられる学生を送り出していきたいと考えています。卒業生の皆様におかれましては、一層のご支援・ご協力を頂戴できれば幸いです。なお、数学教室の近況は、公式サイト<http://www.math.sci.ehime-u.ac.jp/index.html>でもご覧いただけます。

末筆ながら、皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。（シャクマトフ デイミトリ 記）

【物理学教室】

同窓会の皆様には各分野でご活躍のことと存じます。物理学コースの近況についてご報告いたします。理学部が一学科体制になり、もうすぐ2年になるとしております。「物理学教室」なる名称を使う教員もいなくなり、教員や学生にも「物理学コース」という名称が浸透したように感じます。前回の同窓会報から教員異動がありました。実験物理学分野の栗栖牧生（熱電物理学）と神森達雄（磁性物理学）の2名の先生方が定年を迎え、ご退職されました。現時点では、理論物理学分野として宗博人（素粒子論）、瀧崎員弘（非平衡統計基礎論）、中村正明（物性理論・統計基礎論）、飯塚剛（非線形物理学）、宮田竜彦（統計力学・溶液論）、実験物理学分野として前原常弘（プラズマ理工学）、小西健介（磁性・低温物理学）、近藤久雄（光物性物理学）、天文学分野として栗木久光・寺島雄一・志達めぐみ（X線天文学）、長尾透・鍛冶澤賢・松岡良樹（光赤外線天文学）、清水徹（太陽系プラズマ物理学）、近藤光志（超高層物理学）が在籍し、教育研究活動を行っております。活動内容に関しては理学部で正式採用しております、researchmap (<https://researchmap.jp/researchers>) からたどっていただければお分かりになれるかと思います。まことに残念ながら、2名分のポストは埋められませんでした。事務組織も縮小され、石田ちひろさんが物理学コースと地球科学コースの2

コースの教室事務を担当されています。

さて、2020年は新型コロナ感染防止対策に翻弄された1年でした。2020年度前期は本学BCPステージの引き上げに伴い、教職員は基本的に在宅勤務となりました。学生は在宅での授業受講でしたが、夏にステージ引下げとともに、演習、実験や実習を伴う授業は対面となりました。この間、多くの教員は遠隔授業体制の構築等、慣れない作業に戸惑いを覚えました。8月に行われた9月卒業・修了の卒論・修論発表会も初めて遠隔で行われました。2021年2月に予定されている発表会も同様です。

運営に携わる一部の教員は教育業務に加え、BCPステージの変更に伴う様々なガイドラインの設定、入試などの対応等で時間に追われ続けました。コロナ禍の危機的状況が、まだ収束の兆しすら見えず、学生ともども不安を抱えているというのが正直なところではないかと思われます。

こうした状況下、卒業生の皆様におかれましても、一層のご支援・ご協力を賜れば幸いです。末筆ながら、皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

(瀧崎 記)

【化学教室】

2019年度の理学部改組により、化学科は理学科化学コースとなりました。学修カリキュラムも2019年度入学生から一新され、現在は旧カリキュラムと新カリキュラムが並走しています。そのようなあわただしい中、今回の新型コロナウイルスの影響を受け、2020年2月末以降、学位授与式・卒業式・入学式等を含めた行事が入試を除きすべて中止となり、卒業証書や記念品の手渡しすらもできない記憶に残る悲しい年となってしまいました。修士論文審査会と卒業論文発表会、化学科謝恩パーティーを直前の2月中旬にかろうじて実施できたのがせめてもの救いでした。海外渡航禁止・帰国の指示により、海外留学中だった化学科の数名の学生やベルギーで海外研修中だった森重樹特任講師は、期間途中・志半ばで帰国し、空港到着後2週間の行動制限も受けました。2020年度第1クォーターは学生・院生の研究活動や対面授業が禁止され、一時は教職員も在宅勤務を余儀なくされました。第2クォーター以降、4年生や大学院生の研究活動は認められたものの、学生実験以外の授業は遠隔のみという、学生・教員の両方にとって困難な状況が続く中、皆の努力と協力、周囲

のご理解のもとで、教育研究に取り組んでいます。

化学科から化学コースに組織名称は変わりましたが、構成員は2年前とほとんど変わりありません。最近の変化をご紹介しますと、2019年度よりCMESの特定教員の田上瑠美助教が、新たに化学コースの教育を担当することになりました。一方で、2021年3月をもって、長岡伸一教授が定年退職を迎えます。2020年度現在の研究室と教員の構成は次の通りです。①固体物性化学・反応化学系：〔固体物理化学〕内藤俊雄・山本貴、〔構造化学〕長岡伸一・小原敬士・垣内拓大、〔無機化学〕高橋亮治・佐藤文哉、〔複合体化学〕佐藤久子、②分析化学・生物化学系：〔分析化学〕座古保・島崎洋次、〔生物化学（プロテオサイエンスセンター）〕杉浦美羽・小川敦司、〔環境化学（沿岸環境科学研究センター）〕国末達也・野見山桂・田上瑠美、③有機合成・物質科学系：〔有機化学〕宇野英満（理事）・奥島鉄雄・高瀬雅祥、〔有機化学（学術支援センター）〕谷弘幸・倉本誠・森重樹。以上、21名の教員で、理学部化学コース・大学院理工学研究科分子科学コースの教育研究を行っています。厳しい社会状況ではございますが、引き続き卒業生・同窓会の皆様からのご助言・ご支援をお願いいたします。

(小原 記)

【生物学教室】

皆様におかれましてはお元気でご活躍のことと存じます。

前回の同窓会報（平成31年2月）以降の生物学教室の近況をお知らせいたします。平成31年（2019年）4月より、理学部は改組いたしました。それまでの5学科体制から1学科体制となり、生物学科は理学部・理学科の生物学コースとして改組後の教育体制に組み込まれることになりました。生物学教室の人事においては、村上安則准教授が令和元年10月より、佐藤康准教授が令和2年10月より、教授に昇任されました。一方で、加納正道教授と和多田正義教授が平成31年3月に、また、翌令和2年3月には、大森浩二教授が定年退職を迎えられました。大森先生は、平成28年度より新設の社会共創学部に移動されましたが、大学院ではそれまでどおり理工学研究科・生物環境科学コースの教育を担当されており、異動後も引き続き生物学教室での教育にご協力いただいております。長らく生物学教室での教育と研究に貢献されてきた3名の先生に心より感謝いたします。

改組により教育カリキュラム体系は変わりましたが、生物学教室では、これまでどおり、「形態形成」、「生理・適応」、および「生態・環境」の3つの分野を柱として教育と研究を推進しております。形態形成領域では佐藤康（植物形態学）、金田剛史（植物形態学）、高田裕美（発生学）、村上安則（進化形態学）および福井眞生子（進化形態学）の5名、生理・適応領域では井上雅裕（植物生理学）、佐久間洋（植物生理学）、北村真一（魚類感染症学）および仲山慶（環境生体応答学）の4名、生態・環境領域では中島敏幸（生態学）、井上幹生（生態学）、畑啓生（生態学）、今田弓女（生態学）および岩田久人（環境毒性学）の5名が、それぞれの研究室を運営しております。令和2年度においては、卒業研究生46名、博士前期課程の大学院生22名、博士後期課程の大学院生5名が、各研究室に所属して研究に励んでおり、優れた研究成果をあげております。

令和2年の春は、ご承知のとおり、新型コロナウイルス対応に始まりました。年度末・年度始めに予定されていた卒業式や入学式、各種行事等が全て次々に中止となり、4月からの授業は全て遠隔授業となりました。また、4月初めから大学構内における研究活動も禁止となり、学内における学生・院生の研究活動が条件付きで再開されたのは6月になってからです。卒業式や入学式でお祝いすることができなかった卒業生、入学生、また、現在も不自由な状況が続く学生のみなさんに関して、大変気の毒に感じております。予期しなかった状況に、大学や個々の教職員も様々な対応を迫られた年となり、それは現在でも続いております。このような状況下においても、工夫をこらし、在学生のみなさんができる限り充実した学生生活を送れるよう最善を尽くす所存です。卒業生の皆様からのご助言やご協力をいただけるとありがたく存じます。最後になりますが、卒業生皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

（井上 幹生 記）

【地学教室】

2019年末－2020年始にはじまったコロナ禍で日々刻々と情勢が変わる毎日ですが、皆様お元気でお過ごしでしょうか。前号では、理学部〈地球科学科〉として報告を致しましたが、平成31年4月から理学部が改組され、現在は、理学部理学科〈地学コース〉

と名称を変えております。学部においては、まだ2年ほど、地球科学科卒業生がおりますが、それ以降は地学コース卒業生となります。学部組織は変わりましたが、教員組織は、ほぼそのままで理工学研究科数理物質科学専攻地球進化学コース所属となっております。人事では、令和2年3月に森寛志先生が定年退職されました。令和2年4月から、鉱物学がご専門の白勢洋平先生が京都大学総合科学博物館から助教として赴任されました。記載鉱物学や博物学も得意とされ、愛媛大学ミュージアムとの連携活動にも積極的に関わって頂いております。かわって、平成29年4月に講師として赴任されたAlexandara Abrajevitch先生（古地磁気学）は、令和3年3月をもって退職され、ご出身のロシアへ帰国されます。令和元年10月には、楠橋直先生（古生物学）と齊藤哲先生（岩石学）が准教授に昇任されました。地球深部ダイナミクス研究センター（GRC）では、多くの人事異動がありました。まずGRC創設にご尽力され、長きに渡ってその発展に携わってこられた入舩徹男先生が令和2年3月に退職されましたが、引き続き愛媛大学特別荣誉教授として大学に残られGRCセンター長の責務を担っておられます。GRCでは、令和2年4月からグレオ・スティーブ先生が助教として着任されました。さらに、令和3年2月に、新たにもう一人助教の先生が赴任される予定です。一方で、令和2年10月より大藤弘明先生が東北大学へ転出されましたが、クロスアポイントメント制により引き続き学生教育に携わっておられます。また、令和3年2月には西真之先生が大阪大学へ転出されます。令和2年4月には、境毅先生、大内智博先生、西真之先生が、准教授に、また同年10月には、西原遊先生が教授に昇任されました。

現在教室構成員は、学部専任教員7名、GRC所属教員11名、沿岸環境科学研究センター所属教員4名となっております。災害多発・世界的な感染症の拡大など、不安な世情ではございますが、未来を担う若者の大学教育は豊かな未来への架け橋と信じ、困難な中での教育・研究指導に日々努めております。昨年度には、就職戦線に乗り遅れがちな地球科学科生の為の「卒業生OG・OBによる就職支援相談室」を、皆様のご協力で試行開催することができました。ご協力いただいた卒業生の皆様に厚くお礼申し上げます。地球科学教室同窓生の皆様のご健康とご多幸を心より祈念しております。（堀 記）



【第34回 愛媛大学理学同窓会 東京支部総会】報告

理学同窓会東京支部会計幹事 石川 貴之

第34回理学同窓会東京支部総会は2019年（令和元年）9月7日(土)に東京都港区のTKPガーデンシティPREMIUM田町で開催されました。本年度も貸会議室での開催といたしました。

講演会は愛媛大学理学部化学科 座古保先生による『生命におけるタンパク質科学』という題目でお話をいただきました。タンパク質とは、から始まり、タンパク質と疾病、薬の開発のお話まで、タンパク質の構造解析技術の進化により、タンパク質の挙動が理解され、医薬品への応用が広がっていくのを感じました。

先生のスライドには分子モデルやイラストが多用されており、難しい生物化学の分野をととても分かりやすく解説していただきました。



次に愛媛大学理学部長補佐 高橋亮治先生に理学部近況報告をしていただきました。理学部の現状報

告に続いて、理学部理学科1学科構成への改組のお話があり、新しい理学部の姿を知ることができました。私たちが卒業した頃とは社会のニーズも変わってきており、理学部もそれに対応していることは頼もしい限りです。もう一度新しい分野の学問を学びたくなってしまいました。



今年の総会には総勢34名の方々のご出席があり、松山からはご講演をされた化学 座古保先生、化学 高橋亮治理学部長補佐の各先生をはじめとして仲田秀雄理学同窓会会長、数学 平野幹理学部長、生物 井上雅裕副理学部長、物理 前原常弘副理学部長、数学 松浦真也先生、地学 鏑本武久先生、理学部事務課長 鈴木裕子様が上京され出席してくださいました。毎年、各学科の先生を少なくともお一人は派遣して下さるご配慮に対して感謝をしております。またご来賓として校友会首都圏支部長の清水栄

治様、工業会東京支部長の鳥海元忠様、ユーカリ会東京支部長の馬場博史様、東京章光会幹事長補佐の浅野実様、教育学部同窓会東京支部副支部長 森孝枝様にご出席をいただきました。

懇親会の準備が整い、理学部長 平野幹先生のご挨拶、理学同窓会長 仲田秀雄様の乾杯のご発声で懇親会が和やかに始まりました。懇親会では美味しい料理に舌鼓を打ちつつ、趣味や仕事、昔の話に花



を咲かせ、最高のひとときを過ごすことができました。

今年も懇親会の終了後、場所を変えて、今後の理学同窓会東京支部や本部同窓会との協力体制について話し合いが実施されました。せっかくここまで活動が活発になってきたこともありますので、校友会首都圏支部との懇親会共催など、これからの運営に関する課題は山積していますが未来に向けてつなげていきたいと希望していたのですが…。今年になって、新型コロナウイルス感染症が拡大し予想していない事態となってしまいました。松山でのホームカミングデイも中止となり、大学にお邪魔する機会がなくなってしまい、大変残念です。来年は開催できるような世の中になっていることを祈るばかりです。



第35回 愛媛大学理学同窓会 東京支部総会 中止のお知らせ

理学同窓会東京支部会計幹事 石川 貴之

現在発生している新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を鑑み今年度の総会および懇親会を中止いたしました。

今年の総会、懇親会は中止となってしまいました

が、来年度はZOOMの活用など、新しい方式での会員相互の親睦関係を大学の変化と共に未来へ発展させていきたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



平成30年度 関西支部総会

関西支部 堀内 眞 理

支部会則に則り、平成30年度の総会を31年1月19日(土)に大阪倶楽部(大阪市中心部)で開催しました。松山の本部からは東長雄会長に代わって次期会長となられる仲田秀雄氏にご出席くださり、ご挨拶をいただきました。

前年度の会計報告で、今回ご出席ができませんでした松崎貞憲氏(文理・化8)から、29年度秋の叙勲で瑞宝小綬章を受賞された内祝いとしてご寄付をいただいたことが報告され感謝申し上げます。

総会終了後に集合写真を撮り、懇親会に移ってお互いの親睦を深めました。

本会の案内は、当支部発足時の総会やその後の会にご出席いただいた方、出欠のお返事をいただいた方、同級生からのご紹介など、原則的に同意が得られている方がたに差し上げております。今回は48通発送、30名の方からご返信をいただきました。

総会には12名、懇親会には14名ご出席くださいました。

同窓会活動の活発化には、総会・懇親会へ多くの皆様にご参加いただくことが第一歩と思っております。新たなイベントなどが企画できますように、ご友人などに積極的にお声をかけてお誘いいただきますようお願いいたします。

上杉千代氏(文理・生12)が、2018年6月1日に亡くなられたとご主人からご連絡をいただきました。享年78歳。同年3月の総会・懇親会にご出席いただき、次回も楽しみにとおっしゃっていたので大変驚きました。ご冥福をお祈りいたします。



2019年度 関西支部総会中止について

理学同窓会関西支部長 堀内 眞 理

理学同窓会の皆様にはお変わりございませんでしょうか。

関西支部は、東京支部に続いて国内2番目の支部として2018年度に発足しました。

元号が平成から令和に改まって、明けた年度末近く3月21日に2019年度の総会を予定し、会員各位に案内状を発送、総会準備を進めておりました。会員各位からの返信葉書を待つうちに、新型コロナウイルスの問題で世間が騒がしくなり、集会、会食の

リスクを考慮して総会・懇親会の開催中止を決定し、2月22日付けで連絡させていただきました。ただ、その連絡葉書で、本支部会員の久保田信氏(「ベニクラゲ再生生物学体験研究所」所長/代表)がNHK総合の「ダーウィンが来た」に出演され、「不老不死」のベニクラゲの紹介をされる、との予告ができたのは幸いでした。

コロナに明け、先の見通しが全く見えないまま暮れようとしているこの一年ですが、年明け会報が発

行される頃には、終息の方向に向かっていることを、
切に願いつつ、合わせて皆様のご健勝をお祈りいた
します。

会合だより



学科や講座などの同窓会が開催され、お便りをいた
だきました。

第9回生物学有志の同窓会

2019年生物学教室のOB会を実施しました。参加
者は11名でした。4月10日と11日で、場所は、しま
なみ海道岩城島と大三島で1泊です。

(稲荷 公一)



有機化学研究室同窓会 in 三ノ宮

2019年3月16日、有機化学研究室同窓会が三ノ宮
で開催されました。3月16～19日に甲南大学で開催
される日本化学会第99春季年会にあわせて、関西圏
に在住する卒業生を中心に有機化学研究室同窓会を
行いました。今回は、2008年3月に定年退職された
小野昇名誉教授世代の卒業生に集まっていたき、

小野先生をはじめ、愛媛大から異動された小川琢治
教授（阪大）、山田容子教授（奈良先端大）、村嶋貴
之教授（甲南大）、および愛媛大教員（宇野・谷・
倉本・奥島）も参加し、卒業生との思い出や近況を
語り合い、楽しいひとときを過ごしました。

(西〔旧姓：麓〕由美子)



愛媛大学開学70周年記念学術講演会 愛媛大学開学70周年記念有機化学研究室同窓会

2019年10月11日、愛媛大学開学70周年記念学術講演会を開催しました。愛媛大学理学部で勤められたのちに他大学等でご活躍中の3人の先生方、および愛媛大学を卒業・修了したのちに大学で研究・教育にご活躍中の4人の先生方を講師にお迎えして、記念講演会を理学部で開催しました。理学部だけでなく、工学部からも学生が参加し、熱心に講演を聞いていました。

翌12日には愛媛大学開学70周年記念有機化学研究

室同窓会をホテルメルパルク松山で行いました。台風による交通機関の影響により30人ほどの卒業生が参加できませんでしたが、1980年代の卒業生から現役学生とその家族のほか、鈴木仁美先生、小野昇先生、大須賀篤弘先生、山田容子先生、中江隆博先生、および愛媛大教員（宇野・谷・倉本・奥島・高瀬・森）も参加し、卒業生との思い出や近況を語り合い、楽しいひとときを過ごしました。

（奥島 鉄雄）

研究室HP

<http://chem.sci.ehime-u.ac.jp/~orgchem1/index.html>



総会報告



2020年度総会は新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、対面での開催を中止し、「紙面での総会」として今会報12号内で各種ご報告をいたします。各種事業の紹介と報告、会計報告、事務局だよりをご覧ください。

なお、総会における決議は書面で行うことといたします。ご意見ご要望がありましたら、同封のはがきまたはメールにてお寄せください。

理学同窓会役員

〈顧問〉

平野 幹《理学部長》

鈴木 裕子《理学部事務課長》

〈会長〉

仲田 秀雄《文理：物理 20回》

〈副会長〉

大谷 勲《理学：数学 5回》

千葉 昇《理学：地球 1回》

〈幹事〉

岩本 孝《理学：物理 1回》

永井 博《理学：化学 2回》

谷 弘幸《理学：化学 12回》

森本 千恵《理学：化学 13回》

小笠原恵子《理学：地球 5回》

高田 裕美《理学：生物 16回》

鎌田 浩子《理学：化学 19回》

辻田 隆広《理学：化学 21回》

池上 亨《理学：化学 23回》

垣内 拓大《理学：化学 33回》

〈監査〉

二宮 啓二《理学：化学 14回》

佐々木靖夫《理学：生物 8回》

各種事業の紹介と報告



同窓会事業の紹介と報告

1. 主幹事業

○会報発行

第5号以降隔年で発行し、本号で12号を迎えた。

○ホームページの作成及び管理

2018年6月、8月、10月、翌1月、2019年7月、8月、10月、11月に行った。

○会員名簿の管理

随時行っている。

○就職支援

参加者へ援助した。

- その他、支部が特別に行う記念事業等の資金援助

②理学部の学科や講座に常設される同窓会への補助（会則を有し代表者が存在し恒常的に会合が開催されることが補助の条件）

- 同窓会起ち上げ資金の補助（起ち上げ時のみ補助）
- 同窓会会合出席者への参加費の補助

2018年度は化学科構造化学同窓会関東支部20名へ参加費の補助をした。

③常設でないクラス会や同期会への補助

- 会合への参加費の補助

2018年度は生物OB会13名、理学部化学科1976年入学同窓会16名、有機化学研究室 in 三ノ宮29名へ、2019年度は生物OB会11名、愛大70周年有機化学同窓会76名、地球科学2期生同窓会（計画のみ）15名へ補助した。

④理学部と共催により行う事業の遂行

- 記念行事等の開催

2018年度は理学部と愛媛大学理学部設置50周年記念事業を共同開催し、翌3月記念碑の設置及び記念植樹を行った。

- 理学部教員による理学同窓会員に対する科学技術相談の仲介

2. 主催事業

○教員採用者に対する奨励金支給

2018年度12名、2019年度11名に支援した。

○理学部新入生および卒業生への記念品贈呈

2018年度、2019年度新入生各230名へ理学同窓会名入り印鑑ケースを贈り、2018年度卒業生271名へ名入りエコバッグを配布した。2019年度は卒業式中止に伴い記念品贈呈も中止とした。

3. 共催事業

○同窓会員が行う事業に対する援助

①支部及び支部活動参加者への援助

- 東京及び関西支部への支部総会・懇親会を開催する資金の補助

2018年度は東京支部および関西支部へ、2019年度は東京支部へそれぞれ資金の補助をした。

- 支部総会・懇親会出席者への参加費補助

2018年度は東京支部へ39名、関西支部へ15名、2019年度は東京支部へ40名の懇親会

4. 後援事業

○理学部が行う学生の表彰への副賞贈呈

①1年次成績優秀者を表彰する際の副賞贈呈

2018年度21名、2019年度22名の成績優秀者

- へ理学部奨励賞副賞として図書券を贈呈した。
- ②優秀な修士論文に対する表彰がなされる際の副賞贈呈（諸般の事情により修士論文賞受賞者の選考ができず未実行）
- 理学部が行う卒業生の協力を必要とする授業の開講に対する支援
- ①学生の多能的能力涵養授業への支援（現在までは大学から必要資金を調達できるため未実行）

- 愛媛大学留学プログラムによる学生の海外研修に対する協力金拠出
- ①理学部が立案する留学プログラムに参加する理学部学生の海外研修に必要な資金の一部を拠出
- 2018年度10名分，2019年度1名分 えみか基金への寄付を通して支給した。

開学70周年及び第10回ホームカミングデイ 合同記念式典・合同祝賀会開催

理学同窓会会長 仲 田 秀 雄

昭和24年5月に3学部体制で新制国立大学として開学した愛媛大学は、令和元年で70周年の記念の年を迎えました。またホームカミングデイも10回目の区切りの年を迎えました。これを記念して、開学記念日である令和元年11月11日(月)に松山市内のホテルにおいて、合同の記念式典及び祝賀会を開催しました。国会議員、県内自治体の首長、県内外の大学、関連企業・団体の代表者、校友会・同窓生の皆様、本学の退職教職員及び現職教職員ら約300人の臨席を得ました。

大橋裕一学長が「愛媛の知の拠点として、より地

域から信頼され愛される大学を目指す」と挨拶を述べました。来賓の方々の祝辞のあと、松山市在住の俳人で本学の客員研究員の夏井いつき氏による「俳句で育てる心と言葉」と題する特別講演をいただきました。その後、学長も所属するコーラスグループ、附属小中学校のコーラス部、チアリーディング部等のパフォーマンスがあり、式典は大いに盛り上がりました。

続いての合同祝賀会では、大学紹介映像等もあり、楽しい時間を過ごすことが出来ました。最後に、参加者全員で学歌を斉唱して閉会となりました。



理学部設置50周年記念植樹

理学部設置50周年記念事業の一環として2019年3月22日(金)大安吉日に理学同総会会長、愛媛大学後援会会長、理学部長等関係者の方々にお集まりいただき、理学部設置50周年記念植樹セレモニーが行われました。

愛媛大学後援会にもご協力いただき、かねてより行われていた常緑ヤマボウシの植樹、記念碑設置の工事が終了し、植樹セレモニーを行うこととなりました。

した。

最近の理学部構内の諸工事により、古くから親しんできた樹木が失われましたので、今回の植樹（常緑ヤマボウシは大樹にはならずせいぜい中高木かと思いますが）は新しいシンボルツリーが構内にできることになり、同窓生にとりましてうれしいことです。

(東 長雄)

「理学部設置50周年記念碑の設置及び記念植樹式」を開催しました【3月22日(金)】

平成31年3月22日(金)の大安吉日に、理学部・理学同窓会・理学部後援会の三者において、「理学部設置50周年記念碑の設置及び記念植樹式」を開催しました。

植樹式には平野幹理学部長、東長雄理学同窓会長及び山内和美理学部後援会長のほか、理学部教職員が出席しました。

加納正道理学部設置50周年記念事業実施委員長によると、植樹された常緑ヤマボウシはかつて教養部の中庭にも植えられており、6月頃に見事な白い花を咲かせてくれるそうです。また、記念樹としても人気があります。

当日は、松山市においてもいよいよ桜が開花すると予想される中、平野理學部長、東同窓会長及び山内後援会長がスコップを手に、この木の生長とともに理学部のさらなる飛躍を祈念し、植樹を行いました。

理学部は、5学科から分野横断機能とキャリア形成機能を強化した1学科5教育コース3履修プログラムの教育体制に改組し、平成31年4月から理学科1期生を迎え、新たにスタートします。

(児玉 豊美)



植樹の様子

左から 山内理学部後援会長、東理学同窓会長、平野理學部長



みんなで記念撮影



2018年度 (2018.4～2019.3)

収 入		支 出	
2017年度より繰り越し	¥22,136,885	通 信 費	¥85,304
会 費 (237人)	¥4,740,000	名 簿 管 理 費	¥54,000
利 子	¥2,727	支 部 等 補 助 費	¥734,000
		運 営 費	¥973,968
		会 報 発 行 費	¥1,222,889
		学 生 支 援 費	¥919,083
		総 会 準 備	¥865,289
		理学部50周年記念事業費	¥4,600,000
		2019年度へ繰り越し	¥17,425,079
収 入 計	¥26,879,612	支 出 計	¥26,879,612

2019年度 (2019.4～2020.3)

収 入		支 出	
2018年度より繰り越し	¥17,518,079	通 信 費	¥45,321
会 費 (233人)	¥4,660,000	名 簿 管 理 費	¥355,320
利 子	¥34	支 部 等 補 助 費	¥432,000
		運 営 費	¥687,764
		学 生 支 援 費	¥648,844
		2020年度へ繰り越し	¥20,008,864
収 入 計	¥22,178,113	支 出 計	¥22,178,113

事務局だより



本部事務局より主な活動報告と原稿募集のお願いです。

1. 役員会の開催

2018年度(平成30年度)最後の役員会を3月4日に14名の役員参加で開催しました。主に愛大基金寄付について、「2019年度役員業務の手引き」改正点、教員採用予定者における奨励金制度に関する要項改正等の議題について論議し、理学部開設50周年記念植樹に関する報告を行いました。

2019年度(令和元年度)の定例役員会を8月23日に11名の役員が参加して開催しました。「理学同窓会役員業務の手引き」の改正、愛媛大学開学70周年記念式典等の議題について話し合い、有機化学研究室同窓会補助金申請が承認され、会務報告を行いました。「手引き」の改正を受けて教員採用予定者に

おける奨励金について、申請締め切りを1月末へ変更し、当面は予定者にも決定者にも支給していくこととしました。また、8月末にはメール役員会として、「理学同窓会役員業務の手引き2019年度改定版」の承認、東京支部および有機化学同窓会補助金申請の承認について審議のうえ承認されました。「手引き」の改正を受けて教員採用予定者における奨励金について、申請締め切りを1月末へ変更し、当面は予定者にも決定者にも支給していくことになりました。さらに、「愛媛大学開学70周年及び第10回ホームカミングデイ合同記念式典並びに合同祝賀会」について案内を送付し、役員の出席者を募りました。

2020年度の役員会は世界中を襲ったコロナ危機ともいえる災禍の中、感染拡大防止ガイドラインに基づき11月13日に、会長、副会長、監査 会計担当の幹部役員5名での会議を行い、11月中旬にメールにて審議を行うこととなりました。メール役員会では総会の実施、次期役員について幹部会で審議された案が承認され、添付資料にて会務報告を行いました。

その結果、2020年度愛媛大学理学同窓会総会は「紙面での総会」として、今会報第12号内にて報告し、メール、はがき等で承認を受けることとなり、次期役員は原則2020年度の役員が継続することになりました。

2. 会報の発行

平成26年9月から東会長のもと、理学同窓会活動のさらなる活性化に務めて参りました。2年毎の会報発行も順調に進み、前号の会報11号は2019年（平成31年）2月に発行し新同窓生には卒業式に手渡すことができました。本同窓会の会員は約9,000名のうち連絡先が判明している3,256名に会報を送付しましたが、あて先不明で返送されてきたものが多数ありました。住所を変更された方は、メールまたは同封の住所変更ハガキにて同窓会にお知らせくださるようお願いいたします。住所変更ハガキは、2年間送料不要の手続きをしております。お手元に保存していただき、住所等の変更の際にご活用ください。また、2020年（令和2年）秋より会報第12号（本会報）発行の準備も進めてまいりました。

3. その他

2018年度（平成30年度）の卒業式当日に新会員（卒業生）約270名に記念品（同窓会名入りのエコバッグ）を贈り、住所連絡用の書類を渡して新しい住所が決まったら同窓会に連絡するようお願いしました。卒業記念パーティーでも東会長が挨拶において重ねてお願いしましたが、残念ながら2019年度（平成31年度）の卒業式は中止となり、仲田会長の書面での挨拶と住所連絡用の書類を学位記送付時に同封させていただきました。

この他に、ホームページの更新、会員名簿の管理も随時行っています。

4. ホームページの原稿募集のお願い

理学同窓会のホームページ（<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku>）では下記の2項目について同窓生の皆様からの原稿を募集します。投稿は郵便かメールでお願いいたします。なお、これらの原稿は同窓会報にも掲載させていただく場合があります。また、より多くの会員の近況を事務局で把握するために、同窓生による小規模な同窓会の開催やユニークな活動をしている会員の情報、さらに本同窓会員が職業や社会活動などにより受賞をしたというようなニュースなどもご存知の方は事務局へお知らせください。

《会合だより》

同窓生の皆様の会合開催等の原稿を募集しています。それぞれの学科で同期会等を多々開催されているとお聞きます。今後はこのような会を開かれた際には本部事務局にもご一報くだされば幸いです。ホームページで報告したいと考えています。写真も歓迎します。

また、会の開催案内もホームページにより広報できると思いますので、是非ご活用ください。

《会員近況》

近況報告欄の原稿を募集します。同窓生の皆様の近況をお知らせください。写真つきも歓迎します。ふるって投稿ください。お待ちしております。

送り先

宛 名：愛媛大学理学同窓会

住 所：〒790-8577 松山市文京町2-5

メール：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

あとかき



2020年、大混乱の1年でした。「新型コロナウイルス感染拡大」により全世界で「命の危機」が叫ばれる中、社会や経済をはじめあらゆる分野が活動停止に追い込まれるなど大打撃を受けました。今もその影響は多少の強弱はあるにせよ収まることなく続いています。日々の会話に「自粛・強制」、「デマ」、「差別」などの言葉が以前にも増して増えているように感じます。

8月に開催予定であった「2020東京オリンピック」も2021年に延期が決定されましたが、現在の東京を中心とした全国に及ぶ感染拡大は、予断を許さない状況です。一日として「コロナ感染者数」や「感染の状況と打つべき対策」の議論や批判の報道がない日はありません。

このようなコロナ禍にあって、本年度開催予定の2年に1度の理学同窓会総会も誌上での実施を余儀なくされました。あらゆる会議、イベント等がその影響を受けている状況であることを踏まえ、仲田会長を中心に関係者で協議した結果です。支部総会もすべて中止せざるを得ない状況であるとのことでした。ご理解をお願いします。

日ごろからご支援ご協力をいただいております同窓生の皆様には、この状況を乗り越え更なる飛躍のため日々活動されていることと思います。本会報にお寄せいただいた玉稿にはご退職の先生方の思いやご活躍ぶり、また理学部各学科の現状や動向、貴重な情報などが発信されており興味深いものです。本学部の更なる発展のためにも、会員の皆様お一人お一人のご活躍や現状、さらに相互交流や体験談など、今だからこそさまざまな情報を共有したいと考えております。よろしくお願いいたします。

ところで、最近「変化」、「当たり前」という言葉を妙に意識してしまいます。どんなものでもどんなことでも常に変化する、同じものはない。（「生成発展」という言い方もありますが）なのにこの環境が「続

くことは当たり前」と思う自分もいる。これも「コロナウイルス」の影響でしょうか。「生きる」ということ。そして表裏一体の「生・死」について考える機会が少し増えました。「今ここを善く生きる」、「正しく在る」ことの意味を考えたりもします。小さな変化に気付き、大きな変化に遅れながらもうまく対応したい。そしてそれが当たり前と感じられるように進みたいものです。念願だったワクチンも開発されました。治療薬の研究開発もそう遠くはないように感じます。ある新聞の社説に次のような一文を見つけました。『味わったつらい今年の体験が、いつか光に変わる日が来ると信じたい。そんな前向きな気持ちで迎春の太陽を全身で浴びたいと思う』と。元気が出ます。（I・O）



愛媛大学理学同窓会 会報 第12号（文理学部同窓会報より通算24号）

令和3年2月 発行 愛媛大学理学同窓会

〒790-8577 松山市文京町2-5 愛媛大学理学部内 FAX：089-927-8424

メールアドレス：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

ホームページアドレス：<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku>